



Newspaper in Education

NIE ニュース

エヌ・アイ・イー

第83号
2016. 4. 15

●特集・人生を切り拓く力と NIE▶1~3 ●兵庫県内2校で ICT 授業／日本 NIE 学会「カリキュラム」セミナー／「職員室 NIE」のすすめ▶4~5 ●吉成前 NIE コーディネーター退任挨拶／アドバイザー紹介▶6~7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2016年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル [\[http://nie.jp\]](http://nie.jp) [\[http://www.facebook.com/Nie47\]](http://www.facebook.com/Nie47)

特集

NIE 人生を切り拓く力と

情報があふれる現代、子供たちには自ら人生を切り拓く力が求められている。自立した人間として課題と向き合い、解決に向けて協働して取り組む力を育むために、NIEが貢献できることを探った。巻頭は、4月から新聞協会NIEコーディネーターに就任した関口修司氏に執筆いただいた（吉成勝好前NIEコーディネーターの退任挨拶は6面に掲載）。

終戦直後、日本人は好むと好まざるとにかかわらず、自ら人生を切り拓かなければならなかった。数少ない情報をよりどころとし、知識を生きる糧として人生を切り拓いてきた。そのとき、新聞は数少ない情報源の重要な担い手であった。

時代は移り、現在も自ら人生を切り拓く力が強く求められている。しかし、今日求められているのは、終戦後のそれとは異なる。情報が氾濫する現代、目の前にある社会の課題を解決す



日本新聞協会
NIEコーディネーター
関口 修司

るために、信頼性のある情報をいかに早く、確実に選択し、協働して取り組むことが求められている。新聞の役割も当然、変化しなければならぬ。今こそ新聞情報の価値を発信し、多くの人が新聞を手にするようにしたい。これは、新聞界の課題にとどまらず教育界の課題であり、現代社会の課題でもある。

主権者意識の基盤となる 社会参画意識を育む

18歳選挙が始まろうとする中、主権者教育への期待は大きい。教育現場では、にわかに副読本や模擬投票による学習が実践されている。しかし、それだけで投票率が継続的に上がると

は考えにくい。小学校の段階から、自分と社会がつながっていることに気付かせることが必要である。そこで新聞の出番である。NIEは学習内容と社会を結び付け、その延長として社会参画意識を育てる。そのためには、政治や選挙に関わる単元の学習にNIEを重点的に位置付けるとともに、日常的に新聞を学習に活用することが重要である。より実践的なNIEのカリキュラム化が求められる。

生涯にわたって豊かに 学び続ける習慣を育む

高齢社会が進展する中、生涯にわたって学び続ける活力ある国民と文化を育てることが、現代日本の課題である。新聞は終わりのない物語。全ての記事が関連がないようにつながっている。それでいて全てを読まなくても、飛ばして読んでも楽しめる。新聞を読むことが日常生活の一部になることで、生涯にわたって豊かに学び続ける習慣が身に付く。

から新聞に親しむ活動を通して、読む楽しさや知る喜びを実感させ、新聞を読むことが生活の一部となるように取り組むことが重要である。新聞閲読の日常化を促す「NIEタイム」のさらなる普及が求められる。

協働して新たな価値を 創造するコミュニケーション シミュレーションを育む

確かな事実をもとにした情報は、考える根拠となりコミュニケーションの道具となる。うわさ話では、会話が弾んでも、深まることはない。協働して新たな価値をつくり出すことが求められる現代、新聞情報に代表される確かな事実による根拠が会話の質を高め、課題解決に導く。学校教育では、スピーチやディベートの充実、読み比べによるコミュニケーションの深化が期待される。

先の見えない現代、社会の一員として主体的・協働的に課題を解決して、自ら人生を切り拓いていく力を育むために、NIEはなくてはならないものである。

報告 アクティブ・ラーニングは NIEで実現できる



さいたま市立 海老沼小学校 教諭 NIEアドバイザー 菊池 健一

次期学習指導要領のキーワードとして「アクティブ・ラーニング」が挙げられている。これは「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学習」と説明されている。授業で「アクティブ・ラーニング」を実現するには、指導法や教材を工夫し、児童に学習内容と生活とのつながりを実感させる必要がある。なぜなら、生活に役立つと実感することで、児童が学習内容に関心を持ち、主体的に学習するようになるからである。そして生活と関わりの深い社会的現象を伝える新聞はその最適な教材だ。

新聞を活用して学習内容と生活をリンクさせるために行った実践を以下で紹介する。

3学年国語科の「こそあど言葉」(指示語)の学習で、新聞

を活用した授業を行った。教科書では、指示語の役割や種類について確認した後に、教科書に示されているイラストをもとに指示語を使った文を作る活動を行うようになっていく。

しかし、これでは児童が指示語を使う必要性を十分に感じられず、主体的な活動ができません。次の活動を行った。

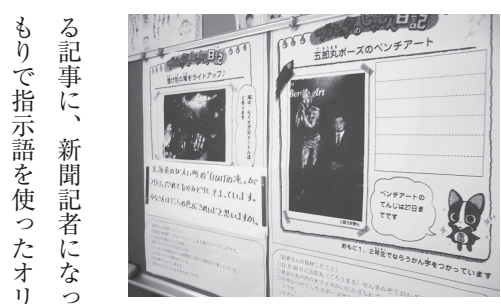
まず、小学生新聞に掲載されている4コマ漫画を取り上げ、せりふの中の指示語を意図的に隠し、そこにどんな指示語が入るかを児童が考えるようにした。児童は普段から親しんでいる新聞漫画であり、ストーリーもあることから、とても意欲的に活動をしていった。また、漫画のせりふにどの指示語を入れるのが適切かを友達同士で話し合いながら学習を進められた。この活動を通して、それぞれの指示語の違いについて実感を伴いながら理解することができた。

報告 「協働的」学習で社会参画意識を育む



筑野市立 紫野中学校 教諭 NIEアドバイザー 森 祐洋

次に、指示語を使って実際に文を作る活動を行った。普段の生活の中で指示語を正しく使うことを意識するために、新聞写真をもとに記事を書くという活動を取り入れた。



五郎丸選手の新聞写真を活用したワークシート

記事に、新聞記者になったつもりで指示語を使ったオリジナル

中学生と接していて感じるの

は、その「忙しさ」である。部活動、宿題、塾通い等、毎日決まっていることに費やす時間が多く、自分のことで精一杯となり日本や世界の出来事に対する興味・関心が薄れている。情報があふれる現代で、世界や日本で起こるさまざまな出来事を知

らない生徒が増えている。関心のあることはインターネットで検索するが、日常の中で新聞を通して世界や日本の出来事に触れる時間や機会がないのだ。

社会科の授業においても、効率的に断片的な知識を求め、教科書を覚えることをゴールととらえている生徒が多くいるのが実態だ。よりよい社会のあり方を考えるなど、教科の本質に迫る意欲が弱い。そこで、社会への関心を高めることで、主権者として社会の形成に参画する力

ルの記事を書くようにした。児童は夢中で取り組み、適切に記事を書くことができた。

小さな単元においても、新聞を教材として活用することで児童の学習を豊かにすることができ。そしてこのような活動をデザインしていくことによって、児童の学習への関心が高まり、「アクティブ・ラーニング」につながっていくのであろう。



意見交流する様子

「2030年に求められる力とは何か」

今の子供たちが成人して社会で活躍する「2030年」は、挑戦の時代である。少子高齢化の進行、生産年齢人口の減少、急速なグローバル化や情報化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものが大きく変化するからである。

文部科学大臣が中央教育審議会に行った諮問（平成26年11月）では、こうした変化の激しい時代を乗り越え、個人の自立と活力ある社会を実現するためには、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が必要であることが指摘されている。

このような認識のもと、中教審では、「社会に開かれた教育課程」の視点に立ち、育成すべき資質・能力の三つの柱が示された（平成27年8月「論点整理」）。

- 「何を知っているか、何ができるか」（各教科等に関する個別の知識・技能の習得）
- 「知っていること・できることをどう使うか」（主体的協働的に問題を発見し解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等の育成）
- 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」（人間性や学びに向かう力等の涵養）

これら三つを発達段階に応じてバランスよくふくらませながら、各教科等の文脈の中で身に付けていく力と、教科横断的に身に付けていく力とを相互に関連付け、より質の高い問題解決のために必要な汎用性のある資質・能力を育成することが求められているのである。

これまでに、資質・能力の育成という観点から、英米独を中心とする歴史系教科の授業を実地調査する機会を得た。それらに共通する取り組みをまとめれば、次のようになる。

- ①思考するための手立て（問いの発見と新たな問い直し、資料の適切な取り扱い、根拠に基づく説明、証拠の信ぴょう性の吟味等）を重視していること、
- ②思考の過程（教師の問いかけに対する生徒との対話や、生徒同士の協働的な取り組みを通して内省的に吟味する機会の保障等）を重視していること、
- ③現在と過去を往還させながら、現在の見つめ直しや未来の捉え直しに必要な理解と認識の育成を重視していること、などである。

未来を切り拓いていく子供たちを質の高い問題解決へと導くためには、学習の手立てを明確にし、能動性を高める取り組みを取り入れて、学ぶことの意義を実感できるように工夫することが必要である。その際、学校での学びと社会



複数の新聞記事の情報を批判的に吟味する学習（愛知県立豊橋南高等学校・西牟田哲哉教頭の実践）

との接点が常に意識されなければならない。「生きた学習材」としての新聞で扱われている情報を事実と解釈に分けて批判的に吟味したり、その情報から新たな問いを見だして調査活動に活用したりする学習は、知識基盤社会における子供たちの情報活用能力を高める取り組みとして有効であろう。

ウェブ掲載略

文部科学省教科調査官
（高等学校地理歴史科担当）

村瀬 正幸

ら記事を選ばせることが、社会への関心を高める上で大切な点だ。ここでは、アフリカの飢餓や子供の労働の実態等に触れさせる。次に貧困の要因を探る。記事の解説に目させ、内戦や難民問題、貧困の連鎖などについて考えさせる。最後に、個人

で考えた解決策（医療支援や農業技術の指導、留学生の受け入れ等）をグループや学級全体で意見交流（評価すべき点や改善案）して、練り直し、リポートにまとめ再度提案する。このような授業は受け身的な授業ではなく、自ら学ぶ意欲を

育てることも有効だ。また、授業と「いっしょに読もう！新聞コンクール」を連携させることも効果的だ。本校は、第6回コンクールで全国の優秀学校賞と福岡県の学校賞を、個人でも全国と県で複数の生徒が受賞できた。このコンクールの

素晴らしさは、自ら選択した記事を親、先輩、級友等と意見交換できることだ。新聞を通して社会の出来事について話し、自分の見方や考え方を広げ、深めることは素晴らしい。校内展示や学級通信でも作品を紹介している。さらに、学区内の小学校

とも連携して、文化祭等で作品を展示し、見る機会も設けている。兄や姉など中学生の作品を見ると感動も大きいようだ。それらの小学校もコンクールに応募している。新聞を通して、世界や日本に目を向けた、視野の広い子供たちを育てたい。

ICT活用したNIEの可能性さぐる 総務省の実践モデル事業に参加



神戸新聞社
神戸新聞パートナー
センターNIE推進室長補佐
山崎 整

総務省の実践モデル事業として昨年10〜12月、兵庫県西脇市立西脇小学校と宍粟市立都多小学校の6年生計約90人が、情報通信技術（ICT）を活用して郷土愛を育む授業に取り組んだ。タブレット端末を駆使して情報を集め、地域の史跡や産業取材・執筆、グループごとにユニークな新聞を完成させた。最終日には両校をインターネット画像でつないだ交流授業も行われた。同事業は、教育現場でICTの有効活用策を探る同省の「先導的教育システム実証事業ICTドリームスクール実践モデル」として、神戸新聞社が提案した「記事を生かした郷土教育」の実験授業。全国から33件の提案申請があり、本紙を含む11件が選ばれた。

NTTドコモと電通が協力、タブレット端末を貸与し、通信環境を整えた上で授業を展開した。児童らは、端末での情報の集め方をはじめ、写真の撮り方、文字や図形のかき方を学ぶとともに、画像の悪用や情報流失の怖さも知った。

西脇小では、約40人ずつ二つのグループに分かれ、それぞれ築約80年にもなる「木造校舎」と地場産業の「播州織」について取材。木造校舎組は、完成当時、小学生だった人を捜し出して話を聞き、市民にアンケート



交流授業が行われた西脇小学校

も実施。播州織組は、郷土資料館や工場を見学、歴史と製造工程を教わった。ともに市長へのインタビュも行った。

都多小では、9人全員が複数の神社へ郷土史家と出向き、何気なく見ていた「オオカミのこま犬」や「夫婦杉」などのいわれを聞き、写真撮影も難くこなした。

次いで両校児童は、取材を基に記事の執筆にとりかかったが、最初の関門は、日頃作文で使っている「です・ますの禁止」。簡潔な表現を意識しながら何とか書き進めていった。レイアウトや見出しも各班の独自色を出そうと、思い思いに創意工夫を凝らしていた。

ICT授業を締めくくるハイライトは、昨年12月15日の交流会。約60名離れた教室にテレビカメラと専任スタッフを配置しスタンバイすると、児童らに緊張感が走った。程なくスタート。カメラが互いの子供たちを映し出した途端、思わず歓声が上がリ、交代で完成した新聞を見せ、学校や地域の誇りについて紹介

し合った。

総務省や教育関係者らも視察に訪れ、タブレット端末により児童の興味・関心が高まり、新聞製作や発表を通じて表現力が育成されたと指摘。ICTが地域の教育に貢献する可能性を実

感していた。

取材・執筆からレイアウト、見出し付けまで指南役を任せられた者としては、もう少しの修正でより光り輝いたであろう計15編の労作を手直しの時間が取れなかったのが悔やまれる。

報告 日本NIE学会セミナー 「NIEカリキュラムを考える」



立川市立須賀野小学校
教諭
論議担任
神戸新聞社
NIE学会
理事
臼井 淑子

日本NIE学会セミナー「NIEカリキュラムを考える」が2月11日、キャンパスプラザ

京都で開かれ、教育関係者や新聞関係者ら34人が参加した。

同セミナーは、今回が3回目の開催である。第1回（東京）では、その現状と課題が論議され、その必要性が確認された。

第2回（京都）では、小中高NIEカリキュラム表を比較検討し、カリキュラムプランの特徴を検証してきている。

学会長（当時）の小原友行氏（広島大学教授）の開会挨拶の後、橋本祥夫氏（京都文教大学准教授）から「先進的な三つの小学校でのNIEカリキュラムの特徴や工夫、課題の発表から、その可能性を探りたい」と今回の趣旨説明があった。



関東、関西、中国、3地域の事例が発表された

川崎市立栗木台小学校の杉山

美佳氏は、前任校の東生田小学校での実践を中心に発表した。

国語科や総合的な学習の時間のカリキュラムにNIEを取り入れた。特徴は、朝タイムと家庭学習での日常的なNIEである。学校経営構想の重点目標と課題にNIEを位置付け、NIEカリキュラムを共有化、6年間で発達段階に応じ段階的に積み上

げる学習を定着化した。

大阪市立開平小学校の中島順子氏は、前任校の真田山小学校から学校全体でのNIEを進めてきた。校務分掌にNIEに関する部署と研究組織を作り、もともとあるカリキュラムにNIEを組み込んでいる。成果は、ニュースコミュニケーション、ニュースコミュニティの発生であるという。

広島県海田町立海田西小学校

の宮里洋司氏は加配NIE教育支援員である。思考力・判断力・表現力・発信力を育む学びのサイクルをNIEで実践・検証しようとしている。特徴的な取り組みは、全学年で月別に作成する小型NIEカリキュラムである。実施教科と関係教科を明示し、育てる力の明確化・系統化を図り、授業書・ワークシ

ート・使用記事を添えたデータベース型カリキュラムを作成している。

学会常任理事の森田英嗣氏（大阪教育大学教授）は、カリキュラム作成法として①コンテンツベース②コンピテンシーベースの二つを挙げた。小原氏は、NIEはユーザーではなく、メーカーであるべきで、コンテンツベースからキーコンピテンシ

ーベースへのNIEであるべきだ、と述べた。

意見交流の後、まとめとして、カリキュラム作成に関わるキーワードが数々挙げられたが、子供や教師を育てるカリキュラム作りと評価規準作りが課題として提案された。詳細は、日本NIE学会ホームページ（<http://www.osaka-kyokiuac.jp/~care/>）で紹介する予定である。

若手教師に「職員室NIE」

NIEの裾野を広げるために、若い教師に新聞に関心を持ってもらうことが大きな課題となっている。「職員室NIE」を提唱する田中孝宏NIEアドバイザーにご執筆いただいた（編集部）。



小松川立東小学校校長
江戸川区立東小学校校長
NIEアドバイザー
田中 孝宏

新聞記事を教育に活用しようと新聞を開いてみる。どんな記事を選んだらよいのだろうか。N

IIEを始めようとしている先生が、「記事選びが難しい」と悩まれている声をときどき聞くこ

とがある。確かに、教科書で教

えなければいけない現状では、自ら題材を見つけないに慣れているのだろうか。そこで、少しでも新聞を知ってもらい、親しんで、そして明日の授業に使えるようにと、おせっかいながら背中を押すことにした。

それが、「職員室NIE」である。やることは簡単、毎日の職員朝会に、選んだ新聞記事を

配って一言言うだけ。しかし、

この一言が結構大事。「教育界の話題」「自然界や世界の出来事の新事実」のうんちくはもちろん、「この記事は、歴史の導入に使えるそうですね」とか、「この人の話は、道徳に使えるそうですね」など、それぞれの教科・領域の目標に合わせた一言アドバイスなどをあげていく。

こうすると、自然と新聞記事をどう教育と関連付けていけばよいかに気付いてもらえる。

現に、数年間これを続けていると、教室のあちらこちらで新聞を使った授業をしている様子が見られるようになった。

選ぶ記事の分類

- ① 新技術未来
- ② 教育最前線
- ③ 自然・風物
- ④ キャリア教育
- ⑤ 食育
- ⑥ 歴史
- ⑦ 地域

今回、次期学習指導要領の論点整理には、教育課程全体を通しての取り組みとして「各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる（中略）教

科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。このため、「カリキュラム・マネジメント」を通じて、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、必要な教育内容を組織的に配列し、更に必要な資源を投入する営みが重要となる（略）とある。

「職員室NIE」を通じて養われる考え方は、まさに「カリキュラム・マネジメント」を支えるための一助になることは必至であろう。「教育に新聞を」から「教育者に新聞を」が必要だ。

「持続するNIE」を目指して



日本新聞協会
前NIEコーディネーター
吉成 勝好

2012年から4年間、NIEコーディネーターを務めさせていただきました。学校現場出身の私に期待されたのは、教育界と新聞界の橋渡し役となつて連携を強めていく役割だったと思います。そのため微力を注いだできた大きな課題の一つが「持続するNIE」の追求です。

実践指定校制度が始まって27年、最大の課題はその継続性にあると思います。数年の実践期間中に大きな成果をあげても、指定が終わった後は、いろいろな事情から火が消えたようになってしまうという例が少なくなかったのではないのでしょうか。この状況を変えるために必要なのは、「学校組織として取

り組むNIE」です。先進的な実践者を中核としつつ、学校全体としての取り組みを恒常化させ、指定校が終わった後も、いや元々実践校でなくても、続けられる体制をいかに作っていくかです。その具体的な方策が、「NIEのカリキュラム化」^①、「年間指導計画の中への位置付け」と、NIEタイムなど「NIEの日常化」だと思えます。

最近、全校あげてNIEに取り組む学校が増えてきたことはうれしいことです。私の夢は、それをもう一歩進めて、長期的なスパンで組織的にNIEを実践する「新聞活用教育拠点校」(仮称「スーパーNIEスクール」)の構築です。都道府県あるいは市区町村の教育委員会と学校、NIE推進協議会、新聞各社とが協定を結んで「ヒト・モノ・カネ」の面から長期サポートする実践校です。

拠点校の活動としては、①毎

年何らかの対外的な発信(公開授業、ワークショップ、研究会表会など)を行う、②校内に実践事例と資料を整理集積した「NIE資料室」を設ける、③NIEに関する各種の相談に応じる、④国内外からの見学者を受け入れる、⑤要請があれば講師として職員を派遣する、⑥実践・研究をまとめた書籍を出版する、⑦自主的な「NIE研究会」の事務局や会場となる——などが考えられるでしょう。運営に当たって新聞協会と各推進協議会、新聞各社の支援が重要な役割を果たすのは言うまでもありません。

このような拠点校を中心に、NIEの普及深化のためのネットワークが全国各地に張り巡らされたら素晴らしいと思います。それはさておき、4年間、大変お世話になりました。心より感謝しております。新聞教育は私のライフワークですので、退任後も、どこかでお目にかかることがあるでしょう。その節はよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございます。

校が2012年以降に投稿した800件近いNIE実践例を、校種、学年、教科、使用教科書会社、キーワードなどから簡単に検索できるようにした。実践教師にとどまらず、これまでNIEに触れたことのない教師にも利用されるようPRしていく。

第2回NIE教育フォーラムを開催 新聞協会は6月4日(土)、東京・新橋の航空会館で第2回NIE教育フォーラム「人生を切り拓く——社会とつながる 情報をいかに」を開催する。高木まさき横浜国立大学教授による基調講演「アクティブ・ラーニングと国語の力」と事例報告で構成。事例報告では、主権者教育などをテーマに若手実践教師から報告を受けるほか、ネット教育アナリストの尾花紀子氏からスマートフォンとメディアアリティラシーについて聞く。申し込みは4月中旬以降、NIEサイト(<http://nie.jp/forum/>)で受け付ける。参加費無料。募集人数は150人で、定員になり次第、締め切る。

NIE
フラッシュニュース

学校図書館への新聞配備に向けアピール 新聞協会は3月10日、文部科学省の「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」のヒアリングに応じ、学校図書館への新聞配備に関する地方財政措置のさらなる充実を訴えた。学校図書館での学校司書等と連携したNIE実践が児童生徒の学びを深めた事例を紹介しつつ、小中学校で十分に配備が進んでいない現状を指摘。主権者教育の充実の観点から複数紙配備の推進を求めた。

同16日に開かれた「学校図書館図書整備5か年計画の継続・拡充を求める集い」(主催・学校図書館議員連盟、学校図書館活性化協議会)でも、複数紙配備や地財措置の予算化を訴えた。

NIE実践例ページをリニューアル 新聞協会は4月から、NIEサイト内の実践例ページ(<http://nie.jp/report/>)を、「新聞を活用した教育実践例データベース」にリニューアルした。同サイトでは、NIE実践指定

NIEアドバイザー紹介

①学校名②担当教科③NIE実践歴④新聞を活用するうえで工夫を一言

(敬称略)



●愛知県
岩井伸江(いわい・のぶえ)
①碧南市立西端小学校②
小学校全科③20年④身近で親しみやすい
教材「新聞」を使って「新聞って楽しい
ね」、こんな子供たちの声を聞くことが
できる授業をめざしている。



●愛知県
伊藤彰敏(いとう・あきとし)
①一宮市立萩原小学校②
国語科③17年④「学校で学習したことは、
社会に出て役に立たない」。こんな言
葉が出ないよう、教室と社会をつなぐ取
り組みを大切にしている。



●愛知県
小野浩史(おの・ひろし)
①豊橋市立飯村小学校②
国語科③30年④新聞を活用して子供たち
の「思考・判断・表現」力を育むために
は、情報の受発信の相互体験が効果的で
あるという構えで実践してきた。



●愛知県
岡 充彦(おか・みつひこ)
①名城大学附属高等学校
②社会科③11年④新聞を利用した学習が
自他との対話につながることで、生徒がさ
まざまな価値感を認められるようになる
ことを目的に授業を展開している。



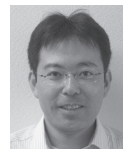
●愛知県
中井敏勝(なかい・としかず)
①名古屋市立志段味西小
学校②社会科③4年④NIEを個人の実
践にとどめずに学校全体の教育活動に位
置付け、組織的に実践を進めることで新
聞活用の裾野を広げることができる。



●三重県
田中基之(たなか・もとゆき)
①度会郡指導主事室②小
学校全科、英語科・社会科③10年④付け
たい力の明確化が大切。アクティブ・ラ
ーニングの視点で、深い学び、対話的な
学び、主体的な学びの過程を工夫する。



●三重県
森田 久(もりた・ひさし)
①三重県北勢教育支援事
務所②中学校社会科③25年④新聞は社会
を読み解く情報の宝庫。見出しや図表・
写真等をスクリーンに提示し、話し合い、
思考が深まる授業展開を心がけてきた。



●三重県
尾関一夫(おせき・かずお)
①桑名市立日進小学校②
小学校全科③22年④子供たちの主体的な
活動につながるNIE活動の創造のため
に、学級活動の時間を有効に使う方策を
考え、実践の広がりにも努めている。



●三重県
中北好美(なかきた・よしき)
①志摩市立志島小学校②
小学校全科③12年④言葉探しや数字探し、
新聞クイズづくり等による低学年からの
楽しい新聞活用。テーマに沿った記事の
収集による課題の追究。



●大分県
平山立哉(ひらやま・りゅうや)
①大分市立寒田小学校②
小学校全科③2年④「教材を発見するん
だ」という意識を持って新聞に目を通す
琴線に触れる記事を見つけたら、即スク
ラップ。タイピングよく実践。



●大分県
永松芳恵(ながまつ・よしえ)
①津久見市立第一中学校②美術
科③3年④教科の特性を生かし、新聞の写真や
記事をカラーージュして作品を作る等、子供たち
が新聞に親しむ活動も交えながら、日常から新
聞に親しめる「場」を設定していきたい。



●大分県
小坂史香(こさか・りか)
①大分県立大分舞鶴高等学校②
国語科③5年④新聞を通して、社会の今(これ
まで)を知り、これからの社会と自分の在り方
を考えていけるように、時宜に応じた記事を選
ぶこと。

第23回新聞配達に関する エッセーコンテスト実施

日本新聞協会は、新聞配達につい
て日頃感じていることをまとめたエ
ッセーを募集している。新聞配達や
新聞販売所に関するちよつといい話、
新聞販売所スタッフとの心温まるエ
ピソード、新聞配達での経験などを
400字程度にまとめ、応募する。
締め切りは7月1日(当日消印有
効)。はがき、封書、ファクス、専
用の応募フォームで受け付ける。今
年度の特別審査員はタレントの春香
クリスティーンさんが務める。詳細
は新聞協会ウェブサイト(<http://www.pressnet.or.jp>)を参照。



本校は、2012、13年度の2年間、NIE実践指定校として活動した。新聞に親しみ、社会を見る目を養うことをねらいとして、新聞記事を切り抜いて感想を添える「スクラップ活動」を行っている。

中学3年生は、新聞記事を読んで感想を書きためている。消費税増税の是非を考える授業では、新聞記事から得た情報とともに、消費税を自分たちの将来の問題として捉え、自分の意見を伝え合うことができた。生徒の振り返りでは、「新聞を読んで、授業以外でも友達と話し合

事務局長から一言

常陸太田市立里美小・中学校は、9年間の連続性や接続性を重視した教育活動を展開し、その一翼をNIEが担う。

う機会が増えた」「友達と情報交換することで知識が深まった」など、新聞を読むことで世

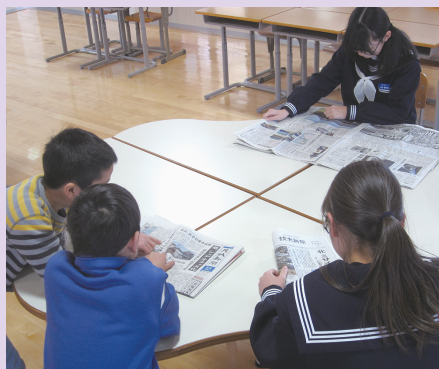
の中の出来事を知り、友達と意見を交流することの良さを感じることができたといった記述が

常陸太田市立里美小・中学校

教諭 細川 雅行

◎茨城県常陸太田市／校長・黒羽 富子／生徒数…小学校127人、中学校60人（2月1日現在）

◎特色…一つの校舎で小学生と中学生がともに学ぶ「施設一体型小中連携校」としてスタートし、2015年度で2年を終えた。休み時間には児童生徒と一緒に遊ぶ姿が見られ、学習や給食などでも交流をし、運動会では小学1年生から中学3年生までが縦割り班を作り、協力して対抗戦を行った。子供たちは、少ない人数ながらもさまざまなかわり合いをし、成長している。



多数見られた。

施設一体型小中連携校の利点を生かした活動としては、小学6年生から中学3年生が、茨城県常総市の鬼怒川決壊で発生した洪水や、戦後70年について同じ記事を読み、意見交流を行った。小学生は、中学生の考えを聞くことで、同じ出来事でも、違った見方や考え方ができるということに気付き、考えも深まった。また、異った考え方を理解しようとする姿勢が育っている。

新聞は、情報源が確かなものしか掲載されず、内容も分かりやすく解説されているので、知識をより深いものにする事ができる。今後も、学習内容と社会の出来事をつなげるために、新聞を授業の中に取り入れていきたい。

賞した。

小中連携教育とNIE、そのモデル校として大いに注目している。

（茨城県NIE推進協議会前事務局長・細谷あけみ）



今年1月、愛媛大学教育学部 の授業とNIE実践指定校のセミナーがコラボした。現役の教員がNIE授業の工夫に満ちた話をし、これから教員になろうとする学生100人がその話を真剣に聞く。その熱い眼差しを近くで見えた◆学生たちのリポートを見ると、「新聞の教材としての深さを感じる」「学習意欲を促す」など、新聞の重要性を感想として述べている。若年層を中心に新聞離れが続き、ネットニュースが話題の中心になりつつあるなか、真剣に新聞に向き合う姿に安堵する◆しかし、まだまだ大多数の大学生はNIEを知らない。多様化するニュースメディアの中で、新聞ならではの丁寧取材した情報や特集、コラムの提供など、新聞の有効性は果てしない。今後もNIEを通じて新聞の果たす役割やその効果を語っていかうと思

（愛媛新聞社・寺尾晃）
※新聞協会NIE関係者リレーエッセー